

すでに三週間前になりますが、前回私たちは、パウロがローマ兵たちの護衛のもと、エルサレムからカイザリヤへと移されたのを見ました。それは、彼に対する殺害計画が起こったからですが、その陰謀に加わったユダヤ人の数は、実に40人を超えていたのです。ですから、パウロが殺されるのも時間の問題であつということが出来ます。ところが、その陰謀は、パウロの甥によって、千人隊長にも知らされる所となり、彼はローマ市民であるパウロを守るため、その日のうちに、彼を総督ペリクスのいるカイザリヤへと送り出したのでした。

1節「五日の後、大祭司アナニヤは、数人の長老およびテルトロという弁護士といっしょに下って来て、パウロを総督に訴えた」。この大祭司アナニヤとは、パウロがユダヤの議会の前で、「私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました」と言った時、近くにいた者に、「彼の口を打て」と命じた人です。その彼が、わずか五日後に、数人の長老たち、そして弁護士のテルトロといっしょに、カイザリヤまで来て、パウロを訴え出たというのですから、いかにパウロに対する敵意に燃えていたかがわかります。

この弁護士テルトロという人は、名前からしてローマ人の可能性もあるようですが、おそらく、ギリシャ語を話し、ローマの法律に詳しかったヘレニストのユダヤ人であったと思われます。総督ペリクスのもとでは、ユダヤでは反乱が多かったといわれますが、さすが弁護士というべきでしょうか、テルトロは、本題に入る前に称賛と感謝の言葉をもって、ペリクスのご機嫌を取ろうとしています。そして、こう言うのです。

5-8節「この男は、まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人という一派の首領でございます。6 この男は宮さえもけがそうとしましたので、私たちは彼を捕らえました。8 閣下ご自身で、これらすべてのことについて彼をお調べくださいますなら、私たちが彼を訴えております事がらを、おわかりになっていただけるはずです」。

この訴えは、パッと読むだけでは、あまり決めてのあるものには思えませんが、テルトロは、大きく三つのことをパウロに対する訴えとしてあげています。まずパウロをして、彼が世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者、という点です。つまり、そう言うことで彼をローマの反逆者にしようとしたのです。当時の世界とは、ローマの統治を意味しますから、そこで騒ぎを起こす者、つまり、ローマの敵ということなのです。

次に彼は、パウロを「ナザレ人という一派の首領」ということで、ユダヤ教の異端の代表者として訴えています。ナザレ人とは、主イエスのことですが、その群れのリーダーということ、パウロをユダヤ教に敵する者としてだけでなく、ローマにとっても脅威的な存在であると言うのです。そして、最後は、「宮さえもけがそうとしました」ですから、パウロが、ユダヤ教の神にも律法にも背く者、つまり、神を冒瀆する者、有罪な者であると主張しています。

このテルトロの訴えに、そこにいたユダヤ人たちも同調したわけですが、そこでペリクスは、パウロに弁明の機会を与えます。まず11-13節を見ます。「お調べになればわかることですが、私が礼拝のためにエルサレムに上って来てから、まだ十二日しかたっておりません。12 そして、宮でも会堂でも、また市内でも、私にだれかと論争したり、群衆を騒がせたりするのを見た者はありません。13 いま私を訴えていることについて、彼らは証拠をあげることができないはずです」。

パウロを訴えたテルトロは、その訴えの最後の部分で、ペリクスに対し、彼が自分で調べるなら、自分たちの訴えている事がらについてわかる（8節）と言いました。でもパウロは、「彼らはその証拠をあげることができないはず」というのです。というのも、また後で開きますが、ここには、もともとパウロを訴えた人々、つまり、アジヤから来たユダヤ人たちはいませんでした。では、この時、ユダヤ人たちは、パウロのどの不正に対して彼を訴えていたのでしょうか？パウロの言うように、彼らには、その訴えに対する証拠をあげることができませんでした。

パウロの弁明の続きを見ます。14-16節「しかし、私は、彼らが異端と呼んでいるこの道に従って、私たちの先祖の神に仕えていることを、閣下の前で承認いたします。私は、律法にかなうことと、預言者たちが書いて

いることとを全部信じています。15 また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。16 そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」。

ユダヤ人たちは、パウロのことを『異端』と呼びましたが、パウロは、この道に従って、自分は先祖の神に仕えている、と言いました。なぜなら、彼は、律法にかなうことと、預言者たちが書いていることとを全部信じていたからです。では、パウロを訴えた大祭司アナニヤと長老たちはどうでしたか？彼らは、死者の復活、霊や御使いも信じていなかったのです。ですから、パウロは、ここでも彼らに皮肉を込めるようにして言いました。「また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております」と。彼がこう語ったのは、律法と預言書、つまり、聖書は実にこの復活の望みを示していたからです。

では、どうですか？ここでパウロが「義人も悪人も必ず復活する、という望み」という時、あなたはそれをそのまま違和感なく、受け入れることができますか？このことは、「義人も悪人も、みな天国に行く」ということでしょうか？なかには、「死からよみがえるのは、クリスチャンだけ」と思っている方がおられるかも知れませんが、でも、実はみなが一度はよみがえるのです。それは義なる方、つまり、主イエスによってさばきを受けるためですが、主によって義と認められる人は、主とともに天の御国を受け継ぎ、でも主を信じない人、主を拒む人は、自分の罪ゆえに、有罪判決を受けて、滅びに至るのです。

当然、パウロの望みは、主によって義と認められて御国を受け継ぐことですが、そのために、自分は「いつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」と彼は言いました。この「最善を尽くす」とは、「努力する」という意味です。なぜ責められるところのない良心を保つのに、努力が必要なんですか？私たちの心は、神ではなく、人でもなく、常に自分自身に向けられている、傾いているからです。それゆえに、私たちはみな、神の前にも、人の前にも、責められるところのあるものなのです。パウロをして、彼が責められるところのない良心を保つよう、いつも努力していたのは、そのためです。

このようなパウロですから、彼がエルサレムに来たのも、当然、ローマやユダヤの人たちに対して、反乱を起こすためではありませんでした。17-21 節「さて私は、同胞に対して施しをし、また供え物をささげるために、幾年ぶりかで帰って来ました。18 その供え物のことで私は清めを受けて宮の中にいたのを彼らに見られたのですが、別に群衆もおらず、騒ぎもありませんでした。ただアジヤから来た幾人かのユダヤ人がおりました。19 もし彼らに、私について何か非難したいことがあるなら、自分で閣下の前に来て訴えるべきです。20 でなければ、今ここにいる人々に、議会の前に立っていたときの私にどんな不正を見つけたかを言わせてください。21 彼らの中に立っていたとき、私はただ一言、『死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれています』と叫んだにすぎません。」

この後半のところはすでに見ましたが、パウロは、弁明の最後の部分で、エルサレムに来た理由が、同胞に対する施し（献金）と、また供え物をささげるためであったことを明かすのです。それによって、大祭司たちの訴えが、何の根拠もないものであり、自分が無罪であることを主張しました。その結果は、22-23 節「しかしペリクスは、この道について相当詳しい知識を持っていたので、『千人隊長ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう』と言って、裁判を延期した。23 そして百人隊長に、パウロを監禁するように命じたが、ある程度の自由を与え、友人たちが世話をすることを許した」。

ペリクスをして、彼が「この道について相当詳しい知識を持っていた」というのと、裁判を延期したこととの関連性がよくわからないところですが、おそらく、ペリクスとしては、パウロのうちに何の罪も見なかったと思うのです。でもだからといって、彼を無罪にするとどうなりますか？この時の相手は大祭司ですから、当然、ユダヤ人たちの不満は募り、下手すると、それが理由で暴動が起こる可能性もあったことでしょう。主イエスの時のピラトと似たような状況と言えます。その懸念もあってか、ペリクスは、裁判を延期するのです。

ただ彼は、二年後に総督の任を退きます。そして、ポルキオ・フェストが、その後任となるのです。では、パウロはどうなったのか？その間、ある程度の自由は与えられつつも、牢に監禁されていました。では、「ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう」とペリクスが言ったことはどうなったので

しょうか？残念ながら、ルシヤが下って来たという記事は出てきません。ただこの件に関するルシヤの意見としては、彼がペリクスに書き送った手紙の中にすでに記されていたのです。23:29「その結果、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことがわかりました」。

ですから、ペリクスとしては、最初からこの問題を解決できなかったのです。ローマ人であるパウロを何の証拠もなく有罪にはできず、でもユダヤ人たちには恩を売りたい、そういうところから、彼はパウロを牢につないだままにしました。そんな彼が、その間、パウロを呼び出して、主イエスを信じる信仰について話を聞いたというのは驚きです。それは妻ドルシラがユダヤ人であったということ、また彼自身、この道について詳しい知識をもっていたということが理由にあげられますが、何といたっても主に心引かれるところがあったのでしよう。ただ彼は、そこで恐れを感じ、パウロを帰らせたとあります。

なぜペリクスは恐れを感じたのか？パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたからです。というのも、彼の妻ドルシラは、ヘロデ・アグリッパ一世の末娘でしたが、ペリクスは彼女の美しさに惚れ、最初の夫から彼女を奪ったといわれています。また「パウロからお金をもらいたい下心があった」とあるように、彼は金銭欲におぼれるような、道徳的に低い生活をしていました。つまり、正義や節制とは反対の生き方のゆえに、彼は神の審判を恐れたのです。

でも神のさばきに対して恐れを感じることは決して悪いことではありません。むしろ、それは良いことです。その恐れゆえに、人は悔い改め、神様に立ち返るからです。でも、それは自動的に起こるわけではありません。恐れを感じつつも、この世の欲、自分を愛する心が、主を信じて、神のさばきから救われることに勝る人も少なくない。それは実に残念なことですが、そのように主から機会が与えられても、主に立ち返ることがなければ、だれも救いにあずかることはできません。

パウロは、このようなローマの権力者のもとで、またユダヤ人と自称しつつ、でも実際には神様に仕えてない指導者たちからの敵意のもとで、二年もの間、牢につながれていたわけですが、私だったら、きっと人生を無駄にしているかのように思えたり、ローマ行きの主の約束を疑っていたと思うのです。では、それは無駄だったのか？パウロは、カイザリヤの牢で、意味のない時間を過ごしたのでしょうか？すでに見たように、彼はそこでペリクスと妻ドルシラに対して個人的に主を証する機会を得ました。しかも、それは幾度もです。その二年後には、ペリクスの後任フェストにも、そして、ヤコブを剣にかけて殺したヘロデ王の息子、アグリッパ二世と彼の妹ベルニケ、さらにはローマの千人隊長たちや市の首脳者たちにも、主を証する機会を得ました。

エルサレムでのなわめと苦しみの後ということもあり、パウロにとって、この二年間は、実に忍耐の間われるものであったと思います。でも、そのただ中で、またその後も、彼の心は折れることなく、主を証し続けた。なぜですか？それは、主にあって、彼が復活の望みを抱いていたからです。その望みのゆえに、彼のフォーカスは、いつも神様の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くすこと、努力することに向けられていたからです。

その最善を尽くすことに関わらず、主が私たちの心を見られるなら、そこには責められるところのある汚れた思いや悪い考えがあることでしょう。でも、それで主が驚かれることはありません。だれも全きよい心を持っている人がいないことを主はご存知だからです。それゆえに、主は、私たちが、その（罪の）事実を認めるかどうか、また、その罪ある者、自己中心な者のために、十字架にかかり、その贖いの死を遂げられたご自分に対して、私たちがどのような態度を取るかをご覧になって、それを責めの判断とされるのです。パウロのように、自分の罪を認め、それゆえに、主の御霊、主のみことばにより頼んで生きようと最善を尽くしている者を、主はその罪を責めるところか、むしろ、ご自身の十字架の恵みによって赦し、また復活のいのちをもって力づけることで、その人を恵みの証人として用いられるのです。